

「現代かなずかい」私案

矢野，文博
三重大学助教授

<https://doi.org/10.15017/12372>

出版情報：語文研究. 4/5, pp.66-71, 1956-10-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「現代かなづかい」私案

矣

矢野文博

内閣告示第三十三号を以て、「現代かなづかい」が「定め」られたのは、昭和二十一年十一月十六日であつたら、もう十年にもなるわけである。言うまでもなく「現代かなづかい」は、大正十三年十二月の臨時国語調査会の「国語及び字音仮名遣」と昭和六年五月の同会の一部修正とを骨子とするものであるが、たゞ違ふ所は、当時教育上に用いられなかつたのに対して、今回は教科書を始めとして、広く新聞・雑誌の協力を得たということである。これは著しい特色であつて、空前の改革とも言うべきものであらう。「現代かなづかい」がこゝまで来た流と勢は、何人も防ぎ止めることは出来ないであらう。それよりも、もともと「現代語音にもとづいて」定められた「現代かなづかい」であつてみれば、その「例外が心要なくなれば廃してよい」⁽¹⁾時期に近づいているのかも知れない。分ち書きの方法さえつけば、助詞の「は」・「を」・「へ」も廃してよい

であらう。たゞ「現代かなづかい」が、国語仮名遣と字音仮名遣を混同したことはまあ許すとして、やり切れないのは語法の問題を考慮しなかつた点である。即ち「美しゅう」とか「行きましよう」とか表記することについてある。そこでかなづかいについて、百年の大計はいざ知らず、差かつての「現代かなづかい」修正案を提出したいというのが、この「現代かなづかい」私案五カ条の趣旨である。

第一 二語連合及び同音連呼の「ぢ」・「づ」も、「じ」・「ず」とする。

二語連合の意識は、いかにも主観的であつて、教養により、年齢によつて異なり、確たる客観性を認め難い。試みにその二三を列挙してみれば次の様である。

(1) はなぢ(鼻血)・ひぢりめん(緋縮緬)・みかづき

(三日月)

(2) ちかづく(近付)・きづく(気付)

ちかちか(近々)・かたづけ(片付)・ことづけ(言付)・動機づけ・かなづかい(仮名遣)

(3) かんづめ(罐詰)・みそづけ(味噌漬)・ほおづえ(頰杖)

(4) もとづく(基一本)・つまづく(躓一爪)

(5) えづくし(絵尽)・よこづな(横綱)・こづかい(小使)

(6) さかづき(盃一酒杯)・ほおづき(酸漿一頰突)

この連合意識は人によってそれ／＼異なるであろう。これが一語として受取られ、そこに連合意識がないとすれば、連濁観念を注文することは無理と言わねばならない。

問題はその連合意識の限界をどこに置くかということである。(6)はもはや論外であろう。「下手の横好き」も元来はヨコヅキであったと言われるが「ズ」・「ヅ」の混同から

今日の様に用いられて、誰も怪しまない状態である。(5)も十年前は粹内にあつた様だが、今日はどうであろうか。(4)は教科書でも時折「基づく」とある様である。(3)も一語と受取り易い。(2)が現に新聞などで、「ことづけ」・「ちかづき」などと記される様になると、立所に「現代かなづかい」の堅城が揺がざるを得ないであろう。要するに語によって連合意識が異なるということになれば、表現方法もまち／＼にならざるを得ない。むしろ連濁という連合意識を止めて、すべて一語と見なすに越したことはあるまい。

同音連呼の場合は、「ちぢみ(縮)」・「つづく(続)」・「つづる(綴)」等であるが、餘り意識すると、かえって「いちじく(無花果)」・「いちじるしい(著)」等の、語源の違うものまで誤る恐れもある。

「難」は「むづかしい」とも「むずかしい」ともいうが、この方は「むづかしい」とは書かないのであり、又「地」は「とち(土地)」と言われるのに、「じめん(地面)」・「じしん(地震)」と書かれて、決して「ち」と書かれないのである。もつともこの呉音の濁音は、前述の連濁等と共に、昭和六年の修正には、除外例として設けられていたものである。この呉音の濁音を認めないと同じ理由で、二語連合並に同音連呼の「ぢ」・「づ」は認めないとすることによって、むだな混乱を防ぐことが出来よう。

第二「オ」の重母音〔OO〕は、「オ」の長音〔O…〕と見なす。

「細則第九」の「オ」に発音される^ハに關するものであるが、この中の「おお」と続く場合、「オ」の長音と區別することは、実際には甚だ困難である。元來長母音は音韻論的には二音節であるが、音声学的には二音節にも一音節にも発音されるものである。「オ」の長音で言えば、〔OO〕とも〔O…〕とも発音され得るのである。けれども結局〔O—O〕と〔O…〕との間には明瞭な差別は無く、言語意識の上では、共に等しく同一の目的観念=O—Oの実現なの

(三) 従って重母音の〔O〕と長母音の〔OO〕とは全く同一となり、長母音の二音節と一音節とが区別し難いと同じ程度に、重母音と長母音とが見分け難いことになるのである。今、重母音と長母音の例を、面白いと思われる天草本の中から引用すると、前者には、

十 (tono-7) 氷 (conori-5)

多 (vouoi-20 etc.) 遠 (tonoi-209 etc.)

通る (tonoru-460) 通す (tonoxi-12 etc.)

催す (moyonoxi-20 etc.)

憤る (igidonori-41 etc.)

結ばほる (musubouoreo-11) (数字は平家・イ

ソボの頁数を示す)

などがあり、後者には

大 (vo-)

(大方・大声・大野・大床・大口・大酒・大綱・大幕・大勢・大様・大指(拇指)・大内山・大茶碗等)

大きな (voqina-5 etc.) 大きに (voqini-8 etc.)

仰せ (voxe-19 etc.)

頬 (fo-409) 狼 (vocame-429 etc)

いほし (ioxi-499 etc. itoxu-139)

負ほする (vosuru-460 etc.)

などがある。右の合音の発音は〔ou〕とわれ、〔O:]

と言われるが、何れにしても長音と考えていゝであらう。

さてこの両者の関係については、その綴り方の相異から、

当然発音の相異も考えられるのである。然しながらこの両

者を比較してみると、はッキリ異なる点も認められると

時に、中々似通った所も多いのである。「多い」・「遠

い」・「通る」・「催す」・「憤る」や「大」・「仰せ」など

は、画然としてゐるが、「結ばほる」や「いとほし」・「負

ほする」になると、その落着く所に迷つて分散したとい

う感じがする。殊に「頬」・「いとほし」が二音節に感ぜられ

るのに、一音節になつてゐるということは、勿論語にもよ

るだらうけれども、当時二音節のものが、少なからず一音

節に発音されていたことを物語るものではあるまいか。そ

して二音節のものが案外多いのは、特に意識されて表記さ

れた為ではなからうか。こうして考えると両者の発音の相

異というものは、特別にはないのであつて、若しありとす

れば、それは二音節と一音節との違いであるとするのが穩

当であらう。才段合勘長音の表記法に「[fió, qíó, mio]

の様な表音的綴字の外に「[féo, qeó, meó]」の様な綴字を

採用したのは、「仮名で『へう』『けう』『めう』と書か

れるのに依る。^(セ)ものなら、意識的に仮名表記との連関に於て綴られたわけであり、この場合も又この意識の外には出ないであろう。即ち長音に発音しながら仮名表記に引かれて、二音節に綴ったのであろう。

このことは裏返して言えば、結局〔OO〕と〔O・〕との区別は、十六世紀も今日も誠に困難であるということである。「こお^り」(氷)と「こう^り」(行李)ではアクセントの違いで、二音節と一音節になるけれども、「とお^(十)」と「とう^(塔)」とはその区別もない。更に「おお^さか^(大阪)」と「おう^さか^(逢坂)」に至っては論外と言わねばならない。

さて長音に統一するとして、その表記をどうするかには問題がある。ア・イ・ウ・エの各列の長音はそれごとく「アあ」・「イい」・「ウう」・「エえ」であるから、オ列の長音も「オお」と統一することも一つの方法であるが、語法的關係を考慮して、やはり「オウ」にしたいのである。即ち「行^こお」・「行^きま^しよ^お」^(オウ)としたり、「よ^お」・「も^お」と記すことをはゞかるからである。

従つて「おう^かみ^(狼)」・「こう^ろぎ^(蟋蟀)」・「ほ^うず^き^(酸漿)」・「おう^い^(多)」・「とう^い^(遠)」・「とう^る^(通)」となり、更に「も^よう^ず^(催)」・「ほ

う^のき^(朴木)」・「ほう^(頰)」・「とう^(十)」等となることになる。

この「オ」の長短の区別があるために、かえつて宇治の黄檗^{わうはく}の駅名が「おお^ばく」と書かれたり、「そう^つと」が「そ^おつ」と書かれたりするのである。「多い」が「おう^い」であるからといって、「多^うござ^います」が「おう^うござ^います」になる筈がない。表音的に「おおう^うござ^います」と書かねばならないことは理の当然である。

第三 拗音の長音はイ列或いはエ列の音に「う」をつける。

「まえ^がき」の発音「三」の「キユウ」以下を「きゅう」・「しゅう」等としないで、「きう」・「しう」等とし、「四」の「キョオ」以下を「きょう」・「しよう」等としないで「けう」・「せう」としようとするものである。

古く竹取物語の「けう^ら」という語は、従来の辞書では多く「ケウラ」と読んでいる様であるが、「キヨ^(清)」ラが「キョーラ」と発音される様になつた頃、「キョー」を「けう」と写したに違いないのである。最近になつて僅かに「辞海」や「新訂大言海」が、はつきりと「キョーラ」と読ませてある。拗長音を「ケウ」の類に写すことは、その後中世になつて、節用集では殊に多く、又本草本にも多いのである。勿論「メウ」を「ミョウ」としたり、「ゲウ」

を「ギヤウ」とすることもあるが、

静めう (xizzumneo—45 xizzumio—43)

繁う (xigneo—60 xiguio—21) 備考 見う (mio)

反对に「ヒヤウ」を「ヘウ」とすることもある。

兵仗 (feogio—8) 備考 軍兵 (gunbio—21)

この「ヘウ」は合音である筈であるが、その誤がかえって開音から合音へ移向する経緯を示している。天草本が仮名表記の「ヘウ」に引かれることは前にも述べた。又文政年間(十九世紀初)に出来たと言われる「いろはかるた」の「れ」は、「良薬は口に苦し」であるのに照らせば、「リヤウ」即ち「リョー」は「れう」と記すのが自然だったのである。殊に「イウ」は当時なお割って発音されたのではないかと言われている。今日「言う」は「ユー」であるけれども、音韻論的には「イウ」であり、又そう書かれている。「ゆう」となると天草本の様に、

言ユの(yui—106, 217)備考 行ユた(yuuta—161, 413)

となる恐れもある。現にそういう方言もある様である。

元来三字を以て、拗音の長音を表わすということは、この上なく煩わしいばかりでなく、通常の音感覚から見ても不自然であり、又読み誤る恐れのあることは、「けう」を電文が採用していることに徴しても明白である。「じょう」が「為よう」か「為う」か分らない場合はよくあり、「よ」

を小書きするということは、案内行われ難く、又同じ平仮名である為に往々見誤られ易い。

こうして「きう」・「けう」とすれば、拗音の長音は、正音の長音に密接に結びついて、整然とした体系をつくる事が出来る。

かあ——きい——くう——けえ——こう

——きう——けう

その上更に大事なことは、これによって形容詞の音便や動詞の語尾を救うことが出来るのである。即ち「美しゅう」・「大きゅう」は、「うつくしう」・「おうきう」となり、「行きましよう」は「行きませう」となるわけである。「言う」も「いう」で何等差支えない。但し他の旧かなずかいの「イウ(友)」・「イフ(邑)」・「ユフ(夕)」等は「ユ」の長音と見なすこと勿論である。

第四 促音をあらわす「つ」は「ツ」とする。

小書きを原則とするが、どこまでも「つ」の音と区別するためである。視覚に訴えることの強さから言っても、片仮名の方が適切であろう。今日「あまつさえ」と言っている語も、元は「あまっさえ」であったので、天草本でもすべ

刺ヘく (amassaye—12 etc.)

である。これなどは促音が誤られて、「つ」の音に紛れ込

んだ例である。序でながら天草本では、促音は「-cc-, -cq-, -tt-, -ss-, -xx-, -pp-」で表記されている。従って原則としては、普通の「つ」は [tcu]、促音の「っ」は [t] で表わすのであるが、時には混同することもある様である。

書物 (xomotu—序、 xomot—2) 雁札 (gansat—69)

末代 (matdai—7, 53) 総別 (sobet—139)

大忠節 (daichūjēt—48) 帥 (sot—7)

などの例は [tcu] として用いられている様であり、これに反して

片鑑踏むや踏ま^つで (fumatcude—50) あわて騒いで馳せ参る。

の例は促音として使われている様である。

表音的に記し易いローマ字綴にして、こういう例の現われるのは、前述の様に仮名表記の影響を受けていることを物語るものであるが、両音価のある「つ」だけに大変興味深い。

第五 拗音をあらわす「や」・「ゆ」・「よ」は「ヤ」・「ユ」・「ヨ」とする。

小書きを原則とし、第四と全く同じ理由に基づくものである。例えば「石屋」は「いしや」とし、医者はいしや

とすれば、両者はお互に誤られることはあるまい。

其の他に類する表記は、これに準じて広く片仮名を以て当てたいのである。例えば「ごっつおう」とか「おとつっあん」とかの様にである。

以上の五項目は、仮名が漢字に置き替えられることによつて、殆どその影を没してしまつて、一般にはさほどの影響はないのであるが、義務教育に於ては重大な問題となるのである。日本語に平仮名と片仮名があるということは、誠に便利であつて、ローマ字の様に語の弁別が出来難い日本語に於ては、この長所をもつと活用しなければならぬと思ふのである。時には名詞や副詞—特に擬声語や擬態語—など、折に応じて片仮名を用いる方が、確かに効果的であろう。

(本文のかならずかいは私案による。—三九二・五稿 三・八二九補)

註(一)金田一京助博士「現代かなづかいと文筆家」(朝日新聞昭和三十一年一月十四日附学芸欄)

(二)小林好日博士「土筆の系譜」(国語学の諸問題)

(三)有坂秀世博士「音韻制度の本質について」(国語音韻史の研究)

(四)ロドリゲス「日本大文典」(土井忠生博士訳)

(五)橋本進吉博士「吉利支丹教義の研究」

(六)前書

(七)森田武氏「吉利支丹資料のローマ字綴」(国語学第二十輯)

(八)金田一京助博士「現代かなづかいの意義」

(九)橋本博士前掲論文

(十)森田氏前掲論文

浜田敦氏「国語音韻体系に於ける長音の位置」(国語学第二十二輯)